

2024年2月18日 仙川教会礼拝説教
詩編1編1-3節 マタイによる福音書4章1-4節
「荒れ野の誘惑」長尾大輔牧師（相愛教会）

今朝与えられた聖書のヶ所は受難節の時に読まれる御言葉の代表的なものの一つです。私の仕えております相愛教会には関係幼稚園がありまして三鷹小鳩幼稚園と言いますけれども。その幼稚園と少しゆかりのある聖書の言葉です。幼稚園の年長さんは一年間かけて4つの聖書の言葉を暗記するのですが、その一つがこのマタイによる福音書の第4章4節なんです。

人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。（マタイによる福音書4章4節）

昔、私の母教会の教会学校でも聖書を暗記する暗唱聖句というものがありました。大人たちよりも、子どもたちの方が、すらすらと暗記しますので、驚くべきというか、負けないように大人も、先生たちも必死にならないといけなかったなと思い出しますけれども。

神の民イスラエルの教育でも、聖書の言葉を覚えるのは大切なことです。有名な聖書の言葉に、旧約聖書の申命記6章4節以下に、こういうものがあります。

聞け、イスラエルよ。我らの神、主は唯一である。

あなたは心をつくし、精神をつくし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

今日わたしが命じるこれらの言葉を心に留め、子どもたちに繰り返し教え、家に座しているときも道を歩くときも、寝ているときも起きているときも、これを語り聞かせなさい。

さらに、これをしるしとして自分の手に結び、覚えとして額につけ、あなたの家の戸口の柱にも門にも書き記しなさい。（申命記6章4-9節）

と、こう言われております。

イスラエルの人たちのことを、神様がどれほど愛され、そして、苦難の時、どのように助けられたか。聖書の言葉を覚えて、それを心に刻みなさいということです。

手とか額に結び付けるというのは、ユダヤの慣習の一つでテフィリンと呼ばれる小さな小箱。その中に、聖書の言葉の入ったものが入れられており、文字通り、聖書と共に過ごすためのしるしなのです。それくらい御言葉と近くなりたいと思っている。聖書を大切にしているのがイスラエルの人たちであります。

バル・ミツヴァという、13歳になったら受けるユダヤの、いわゆる成人式では、子どもたちは、「私は、聖書、神様の律法を守って生きていきます」という約束をします。その時に聖書を朗読する儀式があつて、そこでこのティフィリンを付けてお祝いをするのだそう

です。聖書を守り、聖書と共に生きることが、一つの、大人になる大切なステップだということ。そしてそれは、その家族、また一族の大きな喜びであります。

主イエスも、ダビデの家系、イスラエルの民に生まれ、家族から聖書の言葉や律法を学ばれ、親しんでこられました。そのことが、今朝のマタイによる福音書の第4章が伝えるエピソードの中でも深い意味を持ってくることが分かります。

今日のヶ所の一つ前の第3章において主は、ヨハネから洗礼を受けられました。いよいよ伝道の業に乗り出すためです。全ての人に、神の愛、悔い改め、救いを伝えるため、主の洗礼の出来事がありました。そして公生涯と呼ばれますけど、おそらく30歳頃に主は伝道の旅を始められました。その、救いのため、各地を巡り歩く。その前に為されたのが、この、荒れ野で誘惑を受けるということです。

さて、イエスは悪魔から誘惑を受けるため、霊に導かれて荒れ野に行かれた。(マタイによる福音書4章1節)

他の福音書も、この、主イエスが誘惑を受けられるエピソードを伝えていますが、そのどれも、この出来事とは、霊。つまり聖霊の導きによるのだ。神様が与えられたものだと。そう見つめています。決してこの誘惑とは、悪魔から来たもの。悪魔が、もたらしたものではありません。

ゆえにこれは、3つの誘惑が、この4章には伝えられているのですが、別の言い方をすれば試練です。乗り越えることのできる、耐え得ることのできるものなのです。そのための道が、ちゃんとあるということを私たちは覚えつつですね、今日の話に聞いていきたいと思えます。

主は、何もない荒れ野で40日間、断食をされました。この世のものを絶って、神様と向き合うため。御心に集中するためです。40という数は、かつて神の民イスラエルが経験した荒れ野の旅路の40年間とも対応しています。その記憶が、この、悪魔からの誘惑。主の試練において見つめられているのです。

すると、誘惑する者、悪魔が主の元に来て、言います。

神の子なら、これらの石がパンになるように命じたらどうだ。(マタイによる福音4章3節)

誘惑の言葉です。しかし神の試練でもあります。悪魔の与える恐ろしい試練でない。悪魔と乗り越えるのではなくて、神と共に乗り越える。それが大切なことです。

荒れ野には何もありませんが、石や、砂などはありました。当然、そんなものは食べられません。断食を経ていた主。空腹です。「でも大丈夫。その、あなたの持っている神の子である力を使えば、空腹の問題はなくなるではないか？」悪魔がささやく。神様は石からもアブラハムの子をつくれるのだ(マタイによる福音書3章9節)。主の信じておられる神様

は、創造の神様、全能なる方です。何でもできる。その神の子なる主イエスも、そのような、驚くべき力はあったであらう。

早くその力を、創造の、全能の力を使わないと、あなたは衰弱し死んでしまう。さあ、早く！悪魔は煽ります。けれども主はこの誘惑を退けられます。石をパンにしない。そしてこうお答えになりました。

人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる。と、書いてある（マタイによる福音書 4 章 4 節）

と、書いてある。主は引用されました。書物、文献から。一体どこに、何に書いてあるのでしょうか？聖書です。旧約聖書の申命記 8 章 3 節からです。それは、荒れ野において、かつてイスラエルの民がエジプトから救い出された。いわゆる出エジプトの出来事を忘れるなと言われているヶ所でした。

40 年の荒れ野の旅を思い出さない。エジプトから救い出され、後に、何もない荒れ野においても、主なる神様はあなたたちを養い守られたではないか？マナという天からの恵みがあったではないか？

イスラエルの民とは、パンや食べ物だけで生きている、生きてきたのではない。その心には、神様の言葉がある。すなわち神様の愛があると。困難の時、神は応えてくださったではないか？何度も。あなたに。だから、あなたがたの心の奥深くにはですね。神の言葉、すなわち聖書の言葉が刻まれているんだ。

地上の食べ物は、食べればなくなります。でも神様の恵みと愛はなくなりません。決してなくなる。それは尽きることがない。そして求めるならば、何度でも与えられます。天から注がれるのです。救いの神様を信じなさい。あなたの心にある神様の言葉、愛を取り戻しなさいという。そういう言葉が旧約聖書の申命記には記されています。

先ほどの、関係幼稚園の子どもたちに、この「人はパンだけで生きるのではない」のフレーズを説明するときは、私たちの生活においても、言葉が大切であることを告げています。パンだけでは、私たちの心は、大きく優しく、豊かにはならないよね。私たちの心を大きくしてくれる言葉があるんだよ。

昔、ある年度の子どもたちに、お話したのは。先生のお友だちに、こんな人がいるんだよ。みんなと同じように、小さな頃、幼稚園で聖書のお話を聞いたり、礼拝したり、お祈りしているお友だちがいます。その人が小さい頃に聞いて、大人になっても今も大切にしている言葉があるんだよ。それはね「神様は、どんなに小さいことでも、悪いことは、お嫌いになる」って言葉です。これは幼稚園でもずっと歌ってきた、みんなの大好きな、こどもさんびかの、ある一節なんです。

悪いことを自分がしそうになった時、この言葉を思い出して我慢する。思いとどまれる。私を大好きで、いつも守ってくださる神様が悲しむことは、やっぱり止めよう。そう思い

とどまれるのだそうです。

悪魔の誘惑に流されそうな時、空腹に委ねそうな時、主イエスは、神の子であられること。洗礼を受けておられること。そして今朝のマタイによる福音書 4 章 4 節にある、あの申命記の言葉でもって誘惑を退けられました。御自身の心に幼い頃から深く深く刻まれている言葉を思い起こされた。つまり神様と強く結び付くことで試練を乗り越えたのです。

主の中には父ヨセフが、母マリアが語り、あるいはこどもたち、兄弟姉妹たちと覚え合っ
て、教えられ、ずっとずっと口ずさんできた言葉がある（詩編 1 編 1-3 節）。天の父なる
神様が与えてくださった言葉があった（マタイによる福音書 3 章 17 節）。それが今、光を
放ちました。

そしてあのイスラエルの経験した出エジプトの後の、荒れ野の 40 年。苦難の旅路。その
出来事も今、もう一度、古い記憶が光放ち、今朝の御言葉に触れる私たちに響くのです。イ
スラエルの経験した荒れ野の 40 年。奴隷となり辛い労働の日々を過ごしたエジプトから助
け出されましても、すぐには、安住の場所、神の告げる約束の地に着けなかった。飲み水や
空腹の問題、神からの試練があった。約束の地までの、回り道です。

でもそれは、彼らのため。信仰を強めるためです。荒れ野に神などいない。死へと誘う悪
魔がいるだけだ。自分を守るためには、苦楽を共にした仲間なんて、荒れ野では見捨てても
よい。悪意に委ねても、裏切ってもよい。悪いことが許されまかり通る。全部、私が生きる
ため。「仕方ない」と片付ける。それしかない。そのような失望に委ねるのでなく、苦難
の時こそ、神と強く結び付くためです。救いの神に全てを委ね切るためだったのです。

そのイスラエルの先祖たちの信仰の記憶、物語が、主イエスによって、伝道の第一歩にお
いて、全世界に救いと神の愛を証しすることに豊かに用いられております。そして私たち
にも、試練には意味があると。神と共に、神の言葉をもって乗り越えられるんだと。強い希望
を与えるのです。

誘惑や試練を、私たちはどう乗り越えるのか？今朝のエピソードは伝えております。私た
ちの人生にも、いくつになっても、様々な誘惑、試練があります。それを神の言葉をもって
乗り越えるのか？それとも神を忘れて、何とかやりくりし、手段を選ばず乗り越えるのか？

しかしそのようにして、なりふり構わず、当座の試練を、たとえ乗り越えられたとしても、
もしその時、悪魔のささやきのようなものがあつたとしたら・・・私たちは試練の度に、神
様から離れ、神を愛さず、隣人を愛さず、生きてしまうことにならないでしょうか？

悪魔は空腹にかこつけて、主イエスの力を使わせ、なりふりかまわず、生きるために神様
を無視すること。聖書なんて、忘れてもよい。何の力にも、慰めにも、希望にもならないと。
そう、間違った信仰を植え付けようとしてました。

この悪魔の誘惑は、私たちにも試練の度に襲います。あるいは日々の生活の歩みに忍び寄
るものかもしれません。その時、私たちは主イエスが為されたように、御言葉が私の胸にあ
ることを思い出したいのです。

今朝の聖書の言葉とは教会の伝統において受難節の始まりの時に開かれる箇所です。受

難節で思い起こされるのは主イエスの十字架です。悪魔の力、誘惑、神様から離れさせる諸々の力と、私たちがどう向き合い、生きるのか。それを祈り求める。

受難節は十字架を待ち望む時です。それは主イエスの命の始まりを待ち望むアドベントと正反対の方向に進みます。つまり主の命の終わりを待ち望むことです。

悪魔は十字架を信じていません。命が終わったらダメだ。自分は自分で守らねばならない・・・どこまでも頑なだからです。それゆえ誰の助けも拒むのです。でも十字架は教えてくれます。苦難の時、神の子の命でもって私は助け出されたことを。あなたのためにその命まで捨てる方がいることを。荒れ野の誘惑は十字架を見つめています。それゆえ私たちはキリストの救いを信じてよいのです。苦難の道は必ず信仰の道に変わると。